

Early Exposure

Report 6

「長崎の離島医療・取材レポート」

へき地医療の魅力と苦勞

長崎県は、大小合わせて971の島を持つ、全国で最も島の多い県である。そのうち有人島は73、県全体の約1割の人が離島で生活している。宮内茉奈美さんは祖父が長崎で暮らしていることもあり、以前から離島を含めたへき地医療に強い関心を持っていた。今回、短い夏休みを利用して、二泊三日の強行スケジュールでへき地医療の実態調査に赴いた。



大島の的山診療所近くからの眺め

7/16(木) 長崎・平戸市民病院へ

朝一番の飛行機に乗って長崎に向かった。長崎空港へ佐世保、佐世保へ平戸と2台の高速バスを乗り継ぐこと3時間。さらに平戸からタクシーを使ってひたすら山道を上ること30分。道中、日本最西端の24時間営業のコンビニを発見し、平戸市民病院へ。ここでは父の先輩である賀米副院長に病院内を案内していただいた。病院は1Fが診療所十市役所の保健部門、2Fが病棟、3Fが療養型病棟という構造になっている。平戸市民病院は内科、外科、小児科、整形外科、眼科、放射線科、リハビリテーション科、人工腎透析、人間ドックの9診療科がある。ただし、小児科は長崎大学の医師の派遣引き揚げにより、2008年9月より休診となっているそうだ。眼科は週2日、九州大学から先生がいらつしやる。また、へき地病院再生支援・教育機構の地域臨床

普段の生活から病気が生まれる

ひと通り病院内を案内していただき、その後、

押淵徹院長にお話を伺った。先生は、「普段の生活から病気は生まれます。家に帰ったら、その人がどんな生活をするのか。役割分担されている都市部の病院とは違って、地域医療はそこまで考えて行っていないかねばなりません」とおっしゃっていた。

押淵先生の話は地域医療の真髄に迫っているように思われた。車に乗っていても、すれちがう町の人々の全員に挨拶されている先生を見て、先生が日頃からいかに地域に密着した心のこもった医療を行っているかを垣間見ることが出来た。

7/17(金) 大島診療所への山出張所へ

宿から平戸港までタクシーで向かい、フェリーで大島へ。40分後、大島の神浦港に到着し、診療所の岩見さんが迎えに来てくださる。そこで青洲会病院の内田隆壽先生と合流して、車をとほして



話題の豊富な内田隆壽先生。月に2回ほど大島での診療を行っている

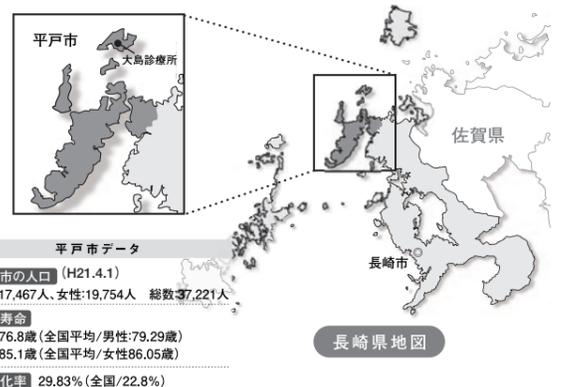
大島診療所へ。看護師さんの制服を貸していただき、診療所の周りをしばしば散策。天気に恵まれたこともあり、海は水面がキラキラしてとても美しくかった。しかし、海に行った30分間、誰もすれ違わなかったのは非常に怖かった。後ろの茂みでカサッという音がしても、それは巨大なトンボだったりする。その後診療所に戻って、診療の様子を見学させていただいた。内田先生の診療スタイルは次のようである。

- ①患者さんの職業などから共通の話題をさぐる。
 - ②患者さんがリラックスしてきたところで診療開始。
 - ③ユーモアを交えつつ、今後の生活についてアドバイス。
- 植物から福山雅治に至るまで、多岐にわたる内田先生の引き出しの多さに脱帽した。

診察が終わった後、内田先生と2階でお話をしながら昼食をいただいた。そこで、離島に医師が常駐することの難しさ(島の閉鎖性)なども色々とうとうとができた。その後、的出出張所へ向かった。着くと、たくさん患者さんが待合室にいらした。待合室が村民の方の交流サロンのようになっていた。待合室が村民の方の交流サロンのようになっていた。待合室が村民の方の交流サロンのようになっていた。待合室が村民の方の交流サロンのようになっていた。

患者さんの生活ごと診察する

計画が十分に練られないまま出発になってしまったため、色々勉強不足だったな……と反省



取材・撮影

成蹊高校卒業 宮内 茉奈美

受験勉強と平行しての旅行&執筆は予想以上に大変でした。正直何度も投げ出しそうになりましたが、それでは取材に協力して下さった皆様に申し訳ないと思いとどまりました。拙い文書ですが、読んで頂ければ幸いです。